

特集 1

外国につながる子どもたちの進路保障—小中学校の支援を経て高校、大学へ

(上智大学グローバル・コンサーン研究所/JSPS「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 実社会対応プログラム」共催シンポジウム記録)

報告 3-2 誰もがチャンスをつかめる社会

Orui João

長吉高校を卒業した、Orui João (オオルイ ジョアン)と申します。発表を見ながら、なんかこう涙が出そうな感じだったんですけど(笑)、私も多分このデータのうちの1人だと思います。まさにデータに表れているとおりですね、外国人の家族はたくさん問題を抱えているんですよ。その問題の中には、まあ文化の違いはもちろん、文化の違いでは片付けられないものがすごくあって。

僕の中では、情報を得る力というのがものすごく低いんですね。やっぱり日本の家庭に比べたら、親が大学を出ていないとか、親が大学教育の必要性をそもそも分かっていないとか、そういった家庭がまわりにたくさんありました。私の親も大学を出ていないですし、そういった環境がたくさんあると思っています。さらに、交友関係の範囲が非常に狭いんですね。やっぱり私の親もそうで、工場で働きにきているわけなので、大体わかると思いますけど、そうすると中卒の日本人などと友達になる。なので高校や大学にどうやって進学をするのか、塾に入れるのか入れないのか、そういった情報を得られるような交友関係では全くないんですね。

そういった問題が、全て私たちにかかってくるというわけで、自分で何とかしなきゃいけない、あるいはヒーローの先生に出会うか、そういうパターンしかないんですね。私の場合はとてもラッキーで、小学校6年生で日本に来た時に校長先生が接待室でですね、私たちに一对一で日本語の講座を校長先生自身がしてくれたりとか、そのまま中学校に上がってもまたヒーローのような先生がいて、その先生の助けがあって私は今ここに立っていると言っても過言ではないと思っています。まあただヒーローの先生に頼るのはあまりにも再現性のないものであると思っています。全員が出会うことはできないので、やっぱり仕組みとして対応すべきかなと私は思っています。

もう1つ大きな問題があって、金銭面ですね。私も例外じゃないですが、そこに座っている森山先生に、定期券が買えないからお金を貸してくださいと言ったことが実話としてあって、私の場合は。まあこんな私でも今は大学を卒業して、その背景には多くの方の支援があって、実現しました。やっぱり金銭面においては、親が工場で働きに日本に来たということで、もう選択肢がないんですね。給料を下げると言われたら他に就職先もないから受け入れるしかないんですよ。ボーナスとか、何それ、存在しない、みたいな。でそ

ういった家庭状況が私だけじゃなく、かなりの人を見てきたし、進学を諦めた友人もいます。

そういった友人たちを見てきて、今日ここに立っているのはある意味罪悪感があるわけですけども。なぜ私は行けて、彼は、彼女は行けなかったのか、と考えます。まあそういった問題は多々あるということで、入試に関してなんですが、長吉高校は私が高校入学をしようとしている時に初めて特別枠を取り入れ始めたんですね。私はネット世代なので、インターネットで調べて、こういう学校もあるんだなど、学区が違ったんですけど、長吉高校だけはどの学区からも受け入れてもらえるということで、受けてみようと思って、中学校の先生に相談して受験して。

実際に入ったらまあものすごく偏差値が低い高校で、最初はすごいびっくりして、やっぱり普通の高校が良かったかなと思ったりもして(笑)。けれどやっぱり入ったら受けられる支援の範囲がものすごく広がったんですよ。さらに自分に近い存在の人たちに出会えたのがすごく良かったですね、自分は1人じゃないと思えた。それによって自分のアイデンティティの確立、というか自分は外人だし、もうこのままの顔で生まれたから、中身は日本人っぽいけど仕方ない、これが私のアイデンティティなんだ、と自分を認めるきっかけになったのが良かったですね。

あとは的確な支援でしたね。私母語がポルトガル語なんですけれども、やっぱり忘れていっちゃうんですよ。母語で何も考えられず、話せず、伝えられないという苦痛に高校に入る直前ぐらいから気づき始めて、高校に入って母語の支援があったので、やっぱりピックアップできたんですよ。ポルトガル語の先生が付いてくれたおかげで。それが非常に良かったですね。実はそれは今の私の仕事にも生かされていることでもあります。

あとは、学校の中で自分の得意を活かしたのがすごく良かったですね。その時に、私はいわゆるパソコンオタクで、暇があればプログラミングとかそういうことをずっと高校の時にしていたんですけど、それに気づいてくれた情報科の先生が声をかけてくださって、自分も進学を考えたいな、と思っていたので、筑波大学に、情報学類という学科があって、学力を一切問わない、問題発見、解決能力のみを見る、AC入試があるというのを先生方が見つけてくださったんですね。この入試では自分で資料を用意して、1つの紙に何を発見したか、どうやって解決するかをまとめたんですけど。

まあそうやって無事合格して、筑波大学に入ったんですね。大学に入る利点は、いくつかあって、体系化された教育が受けられるんですね。いろんな新しい情報に触れられる機会があって、自分の知識も広がるし、さらに交友関係も広がるんですね、これらが非常に私にとっては良かった点であります。今でも困ることがあったら大学の友人に連絡しますし。なのでまあ日本社会の一員として活動できるようになりました。

今は外国の現地法人の代表をやっておりまして、従業員20名程度を雇っている会社に成長し、日本の社会に貢献できるようになりました。でもこれらのラッキーな出会いがあっ

たおかげなので、これが全員同等にチャンスをつめる状況にしていかないといけないと思いますので、ぜひ、みなさんもこのような世の中になるように、いい制度を考えていただければと思います。以上です。

Orui João (オオルイ ジョアン) (長吉高校卒業生)